源氏薫香考

藤原昭恒撰

夫香の道は源八香合より始まり香合は源八薫物合
より出あらく沈香の外は源氏六ヶ敷薫物いろ〳〵
とうこの方香道の心を用ゆる事あまこと年の内
かの六ヶ敷薫物を調し合せてうこふ入れ事
先つ源氏物語をよくよく六ヶ敷薫物の角目を知
ぬ花河時紅梅孟蕚等の文義をよくよく意趣
を覺め薫物の方を温ねもとめて其概をあらこと
抜て又薫物の書薫集薫物語伏見院宸翰の
御記後水尾院御撰集薫物其外家々の

開平氏蔵

穂文庫

筆紙墨硯且平の新古草聚香影聚抄等数
書を以て接合し奉りてこれを為し給うべきなり
抄物の少しく異中の入り仰せ物なり
巻末に六句を過て忘失の分甚だ多
多の編てうの記を此記に加へ出し奉り
とゝ不審の所を悉く仮名を為
撰て こゝまゝ可すべきの所ふ遠を見て可申
かれ考詳て花の事
紫式部源氏物語絵合の巻てうく さくの所
たきもの巻

くさ〳〵の所の名もの 湖月抄に河海抄云種々の草
物〳〵 春梅花 夏荷葉 秋菊色 冬落葉 黒方 侍
従 佞春香 薫香 補闕方 百和香 なとこゝの
まゝの方なり
くはしくこゝまゝ百ふの方なりくまき
ものなりて仮名の所へまをこまへり
百ふの方 湖月抄云光源氏の百歩の午丈て
何ものか 細流抄云 ちるうの四人 明星抄云 ことく
ふ月のなり
梅の花の巻ていとく 雨もまき所ことしいとく 四月

をきてゝの物つまなるべし

四もゝ[illegible]子　細源抄云四月十二日なりうつゝ

のゆて宮も十二年まて書写の事なるへきなり

春宮も始年二月四うゝのさたをゆて

四月もおつくへきなり

四月のうゝ物　五津抄云四月のうゝ元服之儀

物語　紅葉賀乃事とゝ[illegible]之儀昭帝紀也

元服をうゝとゝ[illegible]　河海抄云冷泉院東宮の時

應和三年二月四元服　花鳥餘情云春宮第五

院の事今年十三年之御元服八月余りなるべ

[illegible]

乃ゝ[illegible]冷泉院の二月の例を模也

二月つこもりなれは[illegible]

も焼物合も除ル

四月つこもり　源氏抄云四月物忌の書始なるを

なて生用意の焼物物忌のゆ[illegible]

大蔵の奉仕る香も四月[illegible]

[illegible]二条院の四月[illegible]

てかゝる物のともとり[illegible]

ふるき[illegible]

こまやかなる[illegible]

[illegible]世間に[illegible]ねたるもの[illegible]古院の
所世[illegible]めつらしこまつこと[illegible]まつ[illegible]
[illegible]

ひごんき　細流云金襴[illegible]砂屋抄に袖[illegible]
綺[illegible]けり　河海抄云緋金錦金を織付る錦之

金襴乃数歌

今[illegible]世乃物[illegible]に[illegible]さま[illegible]所[illegible]じ[illegible]てつ[illegible]させ
[illegible]これ[illegible]の[illegible]ものう[illegible]ものに[illegible]人[illegible]給[illegible]
[illegible]も小昔今の[illegible]
[illegible]

二ちさつ　細流抄云何なることなるもて[illegible]物を合
さ[illegible]ふ[illegible]　孟津抄云二種つの内調合之
を[illegible]物上達目の禄[illegible]世[illegible]
[illegible]
内[illegible]　湖月抄云裳着乃用意の禄[illegible]
[illegible]院乃内[illegible]
[illegible]
[illegible]

そうほうの所にまゐりめのふたつの法をしてあらうふけつ
こへこまひとん四月ちかてかなもの
そうほうの　孟津抄云 兼和也 細流云 仁明天皇也河
海抄云 古本ヨリ大異 そもそうほうを
そ屏風書写の誤歟 そう菊を兼和菊と云河此
物語も大乗を大そうとかく愚按ちがひ狂そう
ほうの所にまゐりめと云へきか 花鳥餘情云 そうほうを
そんほうと屏風書写の誤なしと河海抄ハいへる
誠ちがふ歟 和乃字を乃草ちがひてそのちが
きこほうとうちがふへきそうほうをそんほうと云

關根氏藏

ほうハ此物語ハ所縁を所そうと出多り兼乃字をそう
そんほうとうちがふ又うかがひなり 故ハそんほうを兼和
ほうとかへきこ 兼和ハ仁明天皇乃年号なり
所にまゐりめ乃二つの法 細流云 黒方 侍従なり不
傳男ハ制ちがふを いとう源氏ハ侍へかふ
うこハ心ん乃ちがひなり
ちがひて 細流云 西方ハ小寝殿 四屋乃中を
ちがふ乃ハ物を云 四屋乃中をハ少将
もきをこそちがひそこと云 時乃ひこ 花鳥餘情云 放出
西屋こ 梅枝巻ハ 東乃中乃放出ハ東乃対乃西屋こ

中と母屋と東面の廂とのみ男子の障子をそへたれ
ども帳をかけるとこゝろをもつて出入へし
西方のこゝろをもつて方々を給へり
四方のこゝろをもつて孟津抄云只凡帳を中少へゝて
うゑたきものハ和しいるるものなり
八條の或親王の西のこゝろをもつてへくゝなるいとみあるを
のるとゝいふこゝろをもつて少へハ
八条或親王の西のこゝ河海云本康親王一品式部卿号八
条宮仁明天皇第七御子高谷薫物合也
○黒方　沈四両　丁子二両　甲一両　薫陸二両　林蔚金四匁

○侍従　沈四両　丁子二両　甲両　丁二分　薫二分　丹松二分
件二方ハ故八条宮方と云ゝ花鳥餝抄云八条式部卿宮康
親王ハ仁明天皇第五皇子母従四位上滋野河子参議
貞主女也源氏乃合給ふ方ゝ紫乃方と共ゝ侍従黒
方ゝハ条或親王ハ紫の上の父式部卿宮なるべていへり
又女御方ハ右侍男と兼和の帝の西のしもの方ハ
世ゝ右大臣紫上のを正妻と云ふ事ゝ源氏の合給
ふ様と乃こゝしてゝ右大臣ゝ侍ふ人乃ゝ
ハ右ハ乃ゝ方ゝ西ゝも侍従のさゝめ有へし少
ゝ切ゝ所なり

少納言ふみき何ものゝ　細流云源氏も紫上も同方を
調合のゝ招傍屋を見つへきとハいとゝ悔花物
云はなすかゝる加減なるなりけり
人物語　はゝきゝ物あるそひこゝ物なりいつくまも
はまへふぞゝふ人何まゝ　なるに物をうどもこゝ
らのきゝをつくし侍へらかゝも
人物はゝけなき　細源云草子地なり紫上を
八源氏乃御子のごくなるなり御身物て
師後ふいとく物乃姫君分寄乃御親ともなくわろ
くしきなり

うゝこゝ物のそこゝもうつゝのそくしとり花こゝろそへ
もゝ物なりしいまゝしうかへをゝ
そうこゝ物のそこゝもの　孟津抄云香壺まゝ侍情の
御なり花多御情云無屋の調度東屋厨子少箱八合乃
其中二合八唐壺乃第之東乃厨子乃うへ乃をく一合て
蓋壺四入て梅花等乃種乃草物雪毋壺乃
中ゝ何と入り　きゝ八銀盤乃用ゆるなり所乃うへゝ
なりの多光物越し
どこゝ物くゝ物こゝろを侍くゝ　ゝ元白しとも乃をゝれ
多くゝもを多何乃をゝ

形ばかりの歌を詠みつゝ日へゝん　紅葉物云　白川院

せんかたなくて歌ばかりなり

二月の十日頃さこそ咲てはやまへもきく紅梅さかりて

色も香もあるものなれば梅を移す無邪心の宮の見てうめへり

内いそきの人のかの出て歌ばかりなるをとゝのぶしさこそ

今はもはしまりこゝろわきこゝ南中の作隔なくそのの

をのかをとゝ光元春をめて花をめてつゝ切なるの

所望の前渉陽ゆとてもちまきの梅の枝を付るの

物ゝもて年行り宮きこゝめまゝも何ゝ行いなる物

をうをゝすゝ年作ものとて物ゝ和歌行ぶ

所ゝをゝていとゝ年作ゝきこゝこゝつけゝ月をゝ光

ゝゝいそきもの人ゝ人ゝゝゝとて物ゝゝ人ゝゝ

つぎんのをこゝの歌つゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ

うつゝ作人ゝ

ぎんの新古今の歌つゝ人ゝ　湖月抄云

物ゝ行ゝゝまゝゝゝゝゝゝゝゝ巻二ゝ

二種人多ゝ

仙家こんゝの八重葉の枝ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝくゝきもすゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

國學院大藏

ゆゑ云々とも　時々花物を仙葉に枝ゐるとなり
或ハ糸ゐるゆゑ云々とも　云々ハ黒方ゆ縁ある色々
松ゆつけるハ松の雪ゆ想ふ木なり黒方も雪中なる
雪ゆ犯されぬ物とへ　河海抄云文まそてめて
草本ハ枝ゆ物をゆ付ゆ色ゆ付るゆ　芳を紺
瑞籬ゆ云ハ松乃枝ゆつけるゆ　花香餘情云ハ葉ハ
松も梅も枝のもうゆ　云々色々　河海抄
一説云紅白乃花の中ゆ白梅をえらて付るゆ　春花
説ゆ云彫模西説のうゆ　彫を用べし　細流ゆも同
第乃中ゆ枝のもうゆ　造て色ゆ付色々

紫院殿御記
花乃香ハ　枝ゆ香ハ　枝ゆ香ハ　枝ゆ香ハ　神ゆ　あとく
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

花乃香ハ　細流云ハ合を詰ゆ葉物ハ白もなるを
もうつしのもへき神ゆなるへし　と我身を異下し
詰へゆ云ハ云々　神ゆ弾物ハ　ハ　ハ
こうだいゆ手乃ゆ　れ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
くうつけ弾物ハ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
てつけさを詰ゆ宮ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

乃かくろへあるふかくかくし給とうとてしをゆるし給
覺一ゆゑなりなをうの侍ん人なくうゆゑ切りうこと
ゆゑ花なて
こうぞいわきまたらふかるとかも　細流云花号
餘情ふ和歌のうち切りもの　河海抄云香
のうをなものうを誤作　世話をうぞくハ農ふきぬ五きぬ
由況なついぞ
花多餘情云源氏乃筆乃次ゆ　齋院へ参り沙汰所を
きて兵部乃宮ふ見せきたるこ
花乃えふいぞ心を志もるれ人乃ふ先ん者をぶつめぶ

花乃末ふ　如菴乃説ゆ人のうめんうえ源氏の齋院
へ参りきうをとへくいへゆ秋院へ参りぶ人を
ゆ　しむふいへとも面ふき葉物の物を乃けて
いゆ我ハ秋院ふ志もるうの世
こゆ物ゆ
ふ和ふ　時ふ花抄云兵部乃宮ふ定ふ
ふ
源氏
まをゆのふハ志ぶ　き根ゆ花を又もなるゆ人のう
ふくこれてそハをとうのいをなゆれをうふ
てなん

まさ西ゑ門　細流云源氏詞こゝろ葉物あるもなき
方々へ中のふみをくしきゝ侍なれと此石姫君ハ源氏
の一男子にて長仕くくし侍ゝ
いとゝおくゝ仕そうとき人ハ人ゝをいとき中宮まうてさ
せまりてとのゝふるまゝきこゝろ有きかゝ人ゝとを
づらしき所のあらう如ゝ也ゝ有ふこともらあつまよ
くゝもゝもんゝ考けなくくなきこゝを給
いとゝおくゝ仕そ　細流云源氏の男下の詞なり　此石
姫君ハ見まくゝ仕ハ他人ゝ恥ゝくゝ思ひてゝ
ゆゝしゝゝを松好へ中ゝゝ

文の詞
あゝもゝ好もゝ必ゝ必ゝ切ゝ　うゝへきゝをなゝ仕ゝ
あゝもゝ　孟津抄云あゝゝ物とゝ思ゝ　枕草子
宮女御まゝ如ゝ也ゝ　一の中宮まゝ中宮まゝをゝ人ゝを
如ゝゝ思ゝ中ゝ　孟津抄云あゝ
をゝゝ中ゝ給ふ　こゝゝ市ゝゝ乃あゝを給ふゝも
如ゝ　ゝゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ仕ゝを中ゝ如ゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝゝ中ゝ給ふ　孟津抄云源氏乃中心乃理成に
まゝ
源氏の男文詞ゝ
ゝれ　ゝゝ

細源云葉物乃傍方ニ也ハ
ナルハ乃乃也ハ乃ときこえ給へて所ひとり世のきて
ろうをせ給

ふるのうらせん　孟津云君をも雖者乃字ヨリ
無学問者ハ　ものをもとひ給へとひ給へ久へと
細源云為をも者をも知人をもるん雖者乃乃
せんの詞ヨリ行
無学問　いとをもふ乃自性のきこえをなくるの一きなどのいき
さるるとをわきまへて　あ行ものをとりまきる乃
けぢめをこき給ふ乃わうきふるきの所をそそうで

させ給
いとをもふ乃自性乃きこえをなくるのひとをなぶこの
細源云其中者をもの一種のきこをなれなるて
てきをそ　いとをもふ乃自性乃是をもふ仏ヨリ
或説て世こうをなくるうきるのなるんと合ある
頌之句をもる廻し　抄云無部分宮乃言ふまはるを
異下しのひなのふ葉物乃ふく字知ひて　いとをもふ
ひをなくる自性ともふ中ふこ仏流ヲ　ふ
をなくるをもこ者具一ふをつ乃いをてこのとをを
わきまへふこ合をを葉物の一種をて八ふ　者具乃

関根氏蔵

一ときえ給ふ　一ときこなたのいもうとのとうもべ
右近乃ちんとうらん乃の色はなをそへくれのまこと
のたまうけるときハちうこうぶませこまへるを性光
の宰相の子乃兵衛尉にて年ハ十特学りて
つゝへ年ハ廿ばかりとゝもとうきちんぎもひうて
侍をの形をけふ　しやもやもやら殿ばかりをうゝハ
いうもうもうつくりるへるを
右をの陸乃ゝふ乃ゝ　河内抄云義村乃時ハ
右をのちんの法乃地をつもる法代落て
其形をたゝ　ハ　ゝ　ゝ　ゝ

關根氏藏

・さいへども　細流云陳氏も世古氏も黒方を合せ給
へ侍ども是はいかなりしも黒方のつやなきけにわたて生て花
たるとなり　黒方の梅の花はうゑあるべきなりとて
こゝも好　賞まいらるゝこと
考黒方なる白はこゝなり
特再花の後よりて出て而もなく黒方白なるべし
考ぶうは梅とうの中なる花なれ共なをまぎれしうなるべき
うなりとぞあるべし
侍従は梅とうの中花　細流云考ぶうはあんを給ふ
人も物なれども生まれて陳氏の生花とこゝ

五條云黒方の八仙は黒方梅花の三種を
たいらうへの中なる中の梅花を分へて
めうしこう
こゝ梅の中の　細流云梅花を分へて三種と表の
梅とかるかもて梅花を傍化うすること
をこてをやきこて後考ひををへくめづらしうすること
きかをうくをなけこのこゝろの風よさをえんまよさをよ
かなるまをうかしをあしをあるを裏の内をまよ
人をかうかうはうをいどを給ふ中
をやきはををひををへく　五條云白はかをこと
うなり　河海抄云

關根氏藏

○梅花方　沈香八両二分　白唐一分二朱　甲香三匁一分
丑松一分　白檀三分二朱　丁子二分　広香二分二朱
以上十五両三分寛敬僧都伝授丁子加增あるべ
しこれあり香を退き香多きもの
此恒物なるゆえ梅花方に書きるところあり伝ハ
別にあり

かぐべきもしくは出るまと煙をさえぎるべきこと
また荷葉を一年合せ絶へ生ずれば生ずるなり
なるゆえ別にあり

かぐべきもしくは出るまと　湖月抄に如菴方伝ハ

侍従方ハ
こなたをひろめ上方にて数多
つくりなれしかとして荷葉を一種合せ絶へ之煙
をさえぎるべきこと同前ところ花散里
のうらづゝみ斟酌あるべき四季をいとり　かこうハ夏の
華物なり河海物云

○荷葉方　丑松一匁　沈七匁二分　甲二匁二分　白檀二朱
熟金三分　代広香　麝香四朱　或二朱　丁子二匁二分　或安息一分二朱
以上十三匁二分天慶六年二月廿日甲午仏忠朝臣
所献之
四方上
参り物なるゆえ時々あるべきなり

關根氏藏

生て行んもあしかりなんと覺て

時ゝ行る 細流云 梅花荷葉菊花海棠なゞ八

時ゝ動いつゝ人ゝもあそぶべきよりて遊戯せるこ

如菴方説て四方の上のるゝこ時ゝ行るゝ事夏

の内ゝゝ梅花荷葉菊花海棠なゝ合をゝへ花ゝ行るゝ

落葉ゝ行るへきゝとゝまゝ行るゝ事は合を出て八白

いろゝもなゝしゝ雪ゝ月ゝ雪ゝ

今の人ゝの方立ゝ花ゝ行るゝ花の朱雀院のをゝ

さゝゝて白梅紅梅のをゝ行るゝ

夏ゝ方ゝ月ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ

をゝ行ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ

ゝゝ行ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ

ゝゝ行ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ方ゝ月ゝ見ゝ

細流云 舊少記 ゝゝ宇多門之

世物語ゝ八兼平ゝ

の四ゝ一ゝ前ゝ

勢ゝ老ゝ除 ゝ其代ゝ

故ゝ朱雀院の葉ゝ

方ゝ百ゝ百ゝ

ゝゝ百ゝ

關根氏藏

朱雀院の薫物と公忠卿の百歩香と二種を
明恒物語に云ふ誤なり仮名の百歩香と朱雀院の百歩香とは別なり合薬と
云へり　百歩香は四季共納てのかをりなりすれ
ども仏に兼年の百歩香を供仏むしろ
あるかなく仏前のまゝにもてこるべきも
のなり　思ひてとこの詞は花荷葉などは物し
ふ神代世の方を略し上に出して物のをへるを
思ひてといふこゝ　昔の朱雀院は兼年帝の御
西宮物語時部云昔朱雀院初出家の時乗金飾
檳榔毛に世朱雀院は常寺門物語へ兼年物つを

朱雀院と申すきて宇多天皇を昔の字を加へ
て申侍り此物語は朱雀院すは侍るふうて
兼年物つを昔とこゝ　昔の事なり物時は公忠卿の
物方なとなりし故に　河海抄云さきの朱雀院古
今集に朱雀院と詠ひ亭子院と仍さきの朱雀院
も宽平乃帝なるへきの然ても為し此物語の朱
雀院うさきとこの兼年乃聖代合香を好ま
ぬ人なへうの公忠卿号法野井雑方雑
後撰伝下光孝天皇御孫中納言紀子高名業
物合之好手也と延喜天慶の方雑公忠卿の

關根氏藏

人所少舍人大和常主丸並奉仕香之役事

六種の方

四種梅花香源氏物語に多くの名なきもの多しといへる
ゆへ氏の考著の多き中にて其用意ある薬
物合の多きなり此六種の薬物の中にて源氏物
語の中にいまこゝに記るのみなる他の方法を取
ものゝ自切り分けまで普通の六種の薬物
と称する梅花荷薬薫衣香を四季の
方に当てゝ侍従男方の二月四季
少分なれども其傷神祇祭祀も何れ
ゝ方にて是を雑ぜ物の多き中にて六種と
称する偽物是殿宿舎の物記後山殿神楽集
まで是を異にし源氏物語に載るところのみなる
方侍従梅花荷薫衣香の五種のみにて薫衣香
ばかりも第一の方尚方をかへて都て六種の名目
又出多し此六種を四季の方務のうち薫花薫衣
を用ひるいまこれ雅楽院の調一方に男方匂い
をこゝろとしまへ男方花凍水時澤の其匂正被
封寒と何れまく先ゝきてるものあるを

ありとき仏花の香のあつばいー沉水の調しの侍
後徒仏てなまをあしとまた古事云侍後の枝風薫調と
してはなくまをあしくたるべしとこれ枝香まあつべ
しいたくいの上ニ乃き調しの合をあふこうも梅花は枝香
まきの枝のはなぐえんまくまさまる白ひのしとまた
古事云くく梅花枝香多仏りとこれ香の香ふまてまな
花香国 嘉祥香ふまへ薫の薬と一方き調合香へのまをかれ
ふ香ふまとまくまをまを云くまもを花のるかよへりと
是嘉祥香しくまてもなしの枝 花香多仏るへき
とまくまを仏る白ひ出てれんもあひふ しとて数のるのえ

香を調しのふと是雑の香ふ仏上五種くまを此香ふ彩
法乃香ふ元香とそう日の香歩方ふ三種ふして都てふ
ふまくうて菊花薫香の二方ふ四種ふまふまく河海抄
ふまくくの草物を注して四香の方名并黒方伝後を外
の種の方ふもふ数今十種の名目を出しふの時くまを仏る
白とふ注ふまくく春ふ梅花葉ふ梅香枝花薫
又伝後香薫抄ふまくく黒方とふりて枝葉下ふ葉衣
香方二種麝身香兼杉原歩香方三種葉衣香二名黒
方と上方一種玉杉香ふ伝後と又方一種まく初ふの孝又
裏衣香衣袖香ふまふくをふまくをとくとも誤字豊同

香具摺幼行社西名朱不和醫甚之審成事之侍字混在
へし者第和方中しまし〻もとのかうと何仕黒方侍従
ともそ不侍男乃制禁の方中仕河海抄載之所の二方的
第十之へし者〻〻なし故に愚意を開く抄法の基物
方書之第之筆記之所乃写年号数之多之者めて
十之之へ考て一と不之記之所
一侍従ハ方中必其和歌金之成ハ歌金之仕広香
あり其歌金ハ者ともも仕ハ広ハ也唐之歌金
広香与唐の之品ハ互之代用仕
一黒方ハ方中必白相広香何ハ拾芥抄云其方其香名

入香各有所法黒方以広香基陸乃其香也侍従方以麝金
為其香也梅花方以丁子其和乃其香荷葉方以薫香白
相為其香也菊花方以其和基陸乃其香欲甲香以衆
香有混合之用也此若大法性寺殿直筆中写之〻然
ハ河海抄載ところの侍従黒方互之方相地をそ
香具摺幼蘭麝香
方乃侍従黒方ともも又中之花書基之香実製和并基
集都和之見へ之所基方ハ此之のかうなる
一梅花ハ河海抄載之所の ハ誰人乃方とかの
知仕之者〻基ハ物方古中之之之之之之 但唐中

關根氏藏

丁子二分と称す　まこと二分と云ふ事なり　此方
ゟ陸奥へ参る分　今世方法は丁子二分八厘程なり
西之内ゟ伝播ありし　方乃上十五匁三分なり
此方を云ふ事有　都て十四匁一分五厘ゟ
人参丁子を二匁二分ゟ云ふ　外ゟ物自ゟ一分と成て
二分乃過有　此ゟ八倍算誤なり　元中にて諸乃
薬物方ゟ上ゟ　此ゟ梅花方中ゟ薬陸ゟ
異薬陸ゟ方ゟ　猶沼称宰相　臭ゟ乃方のゟ推て
はゟ河内ゟ　沼称宰相の梅花才ゟ沼宰相の方ゟ
沼宰相の梅花乃八唐臭七匁引て薬陸ゟ西ゟ

来ゟ　十五匁二分　近ゟ伝ゟ　此乃
河内ゟ　沼称ゟ八沼宰相の梅花方をもてはゟ方ゟ
臭ゟ八臭ゟ臭ゟ　此ゟ惜ゟを以て　薬ゟ御方もし
八伝忠勢乃方ゟ　方ゟ薬陸　薬香実
聚物ゟ出ゟ方乃ゟ　方ゟ
一分の薬八伝乃方ゟ　方ゟ
方乃ゟ　同ゟ
一薫衣香八朱宮内　方也　此ゟ
文ゟ伝ゟ　乃方ゟ
ゟ八

二百歩方八郎兼加百歩者すり薫物二方ともに方両
物之方ハ方ハ
以上六種也
ムさしく物語ものとくるに河内物の勅る所方
十種方并六種方并其余の五種の方其外種々の方
世ものの方ハ
源氏物語六種薫物之方
梅花　源野宰相真直方
沈香　古唐　甲香　其松　白粗　丁子　広香

以上七品両数都十五為二分也
又方　八佛宮御方
沈香　丁子　甲香　古唐　白粗　其松　広香
薫陸　以上八品両数都十六為三分也
又方　左大臣公方彩色方
沈香　古唐　甲香　其松　白粗　丁子　広香　薫陸
以上八品為物都十五為一分也
荷葉　左同人方　河内河所載同方
其松　沈香　甲香　白粗　麝香　丁香
安息香　以上八品為物都十三為三分也　天暦六年

二月廿五日甲午奉之

侍從　八條宮御方　一名或戸中康親王

沈香丁子　具香　甘松　檀香　広香　以上六品両

数都七両三分也

黒方　義和御御方　右大臣家御方同方

沈香丁子、具香　白檀　広香　薫陸　以上六種両

数都八両三分也

薫衣香　右大将御方

沈香　丁子　黄香　甘松　白檀　香附子　広香

以上七品両数都十六分也

關根氏藏

又方　出河内御方　右方

薫陸　薫香　覆盆　甲香　白唐　青桂枝　牡蠣

理智之　以上六品両数都二十六両也

又方　同前

沈香　甲香　白檀　青木香　丁子　白唐　広香　以上大

凡香附子代以鶏舌香　艾納香代青木香　広香代白

檀代方故或分分親王以上七品　両数都七十分分也

又方　一名黒方　同前

沈香　丁子　薫陸　甲香　以上七品　両数都七両三

分也

關根氏藏

又方一名 鬱身香 同芎藭集裏抄作成方

丁子 薰香 零陵香 青木香 甘松 白芷 當歸

桂心 檳榔子 广香

右十物細搗絹篩乃秤以密紙搗一千杵然後出之

丸如棗核口含咽汁晝夜三日到含十三丸當日自

覺口香五日自覺觜香十日衣被亦香廿日逆風行

他人聞香廿五日洗手而久落地香一月已後抱兒亦

亦香惟忌蒜及五辛等如口香難潔兼每治方万

病一方有告附子西 以上十品兩數如十九兩二分也

百步方 四条百步方 即兼松子步方也

甲香 蘇合香 白檀 零陵香 藿香 甘松

乳香 白檀 广香 麝香 以上十品各數如四

分十二兩也

右十二種搗篩密和之於瓷器中盛埋經三日取

燒百步外聞香仲方出自四条大納言家大江千古

所上也 河内物同之

又方 生白檀

甘松 沈香 青陸 白檀 丁子 以上五品兩數如

十分之一也

又方 同前

關根氏藏

沈香　丁子　甲香　甘松　白檀　以上五品毎数

都合三品也河海物云以上三方以朱注院御方之

右六種各銭十二文方各斤両分朱ノ附緑ノ委ク記

さく

河海抄所載ノ方名摠十三種之内源氏ノ五種者見上

其餘七種之内菊花茱萸　供養香　補闕方　以上四種

者不出方今所恒補之

一菊花　薫集数物ノ知識ノ方即薫香類

聚抄ノ山路家御方長生久視香ノ同方ノ云ヘリ

いとく菊ノ花ノ色ノ美ナルニ同

り手ヲ以テ香ヲ取テ身ニ染ムル事ヲ云ヘリ

ノ方ノ名ヲ物ノ名

一茱萸　薫集数物ニ不知識ノ方即薫

香類聚抄ノ延陽方ニ同ジ古ヘノ本ノ

抄ノ方ノ名ヲ誤ル

一供養香　右両物ノ外ニ方ノ名ヲ

一補闕方　此方ノ詳ナラズ薫物法ヲ抄テ

ヨリ云ヘリ是即待従方ノ名

ナリ可薫集数物伝授方ノ中ニ指麝補闕

關根氏藏

何又拾芥抄巻末に官位唐名部より位袋の方まで
侍従尉　散騎常侍　補闕　拾遺　門下省の名目あり
河海抄より補闕の方といふをもとハ略名ハ位袋の別名なるべし
一方杉原　河海抄所載の方薬集　新撰和名　薬方新製
物ともより同方とよりの方なり
一薫香衣香　唐渡唐の二方ともに河海抄神香の条に
載せり　即ちより方なり
以上七種也

四種補遺薬物方

蔓荊花　少録宮御方　一名長生久視香
沈香　丁子　甲香　薬陸　甘松　広香　以上六品也
西教新合四面丁子也
此方薬香彩聚抄より出ず　四恒抄より薬集新撰
の蔓荊花方より引用人とこれ方と同方に但一方中の香
谷識年の年数と方より清慎公曰蔓荊花方者長生
久視之香也間之薬之効和老抱寿松柏花之日効
之事多院前報合花之方用蔓荊花方方用落葉
方云く我好此方者用之但麝香一分可合加也蔓荊花
盛開甚香馥時拾花置傍和合之或人云蔓荊

關根氏藏

菊花酒許加之ゝ水鳥菊月堺之絵二七日許
入電脳
堅封口
取出又絵二七日許用之若急用者此絵可